

Security Analyses on Key Exchange Protocols using Task-structured PIOA Framework

米山 一樹

國分 雄一

國廣 昇

太田 和夫

電気通信大学

本発表の概要

- Task-PIOAフレームワークを用いた鍵交換プロトコル(Diffie-Hellman)の安全性解析
 - DDH仮定の再定式化
 - DHプロトコルのtask-PIOAフレームワークにおける表現(Real system)
 - 鍵交換理想機能のtask-PIOAフレームワークにおける表現(Ideal system)
 - Real systemとIdeal systemがimplementation relationを満たすことの証明

目次

- 背景, 研究の目的
- Task-structured PIOA (task-PIOA) フレームワーク
(PIOA : 確率的I/Oオートマトン)
 - task-PIOA の構造
 - 識別不可能性 (Implementation Relation)
 - 安全性証明の流れ
- Diffie-Hellmanの鍵交換プロトコルの解析
 - DDH(Decisional Diffie-Hellman)仮定
 - Real System と Ideal Systemの構成
 - 安全性証明
- まとめ

- Task-PIOAフレームワーク [CCK+06]
 - 数理的モデルを用いた暗号プロトコルの安全性検証手法の一つ
 - 数理的モデルのメリット：自動検証が可能
 - Dolev-Yaoモデルや、それを基にしたフレームワークでは難しい計算量的困難性を扱うことが可能である(とされている)。
- しかし...実際の解析例は紛失通信 (GMWプロトコル) のみ
 - 計算量的困難性：hard-core predicate for trap-door permutation
 - 攻撃者のモデル：passive&static

- その他のプロトコル/プリミティブの記述能力は？
- active or adaptiveな攻撃者の定式化は？

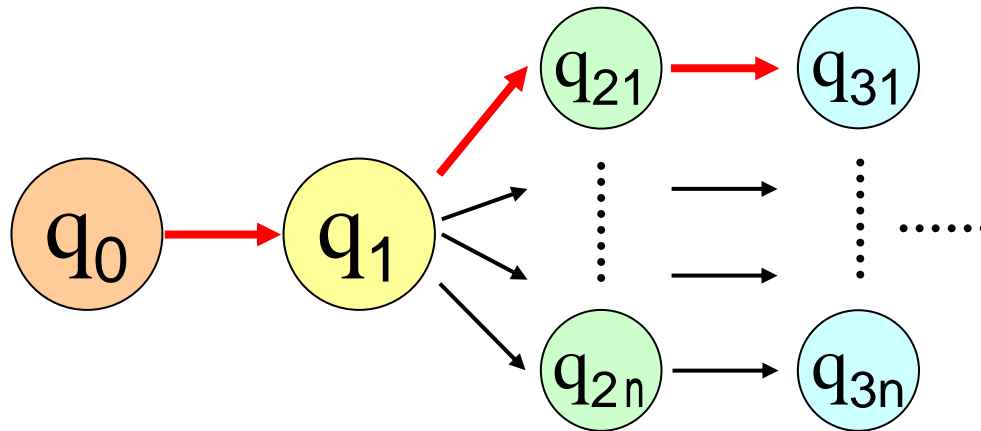
研究の目的

- 紛失通信以外のプロトコルの安全性解析
 - 今回は鍵交換 (Diffie-Hellman) プロトコルに適用する.
 - 計算量的困難性 : Diffie-Hellman判定 (DDH) 問題
 - 攻撃者のモデル : Passive&Static

- active or adptiveな攻撃者の定式化
 - 中間者 (Man-in-the-Middle) 攻撃
 - 理想機能との対話インターフェイス

Task-PIOAフレームワーク

task-PIOA の構造 2/2



- *trace* : 一連の動作中の, 入力, 出力action の集合

$$trace() = \{ a_i \mid a_i \in I \cup O \}$$

- *tdist*() : *trace* の確率分布

- *tdists*(*T*) : *tdist* の集合

$$tdists(T) = \{ tdist() \mid T \text{ は } \text{ を受け付ける} \}$$

識別不可能性の表現

□ Implementation Relation : $T_1 \leq_0 T_2$

定義 どのような Env に対しても,
 $\text{tdists}(T_1 \parallel Env) \subseteq \text{tdists}(T_2 \parallel Env)$
が成り立つ.

・推移性

$$T_1 \leq_0 T_2, T_2 \leq_0 T_3 \Rightarrow T_1 \leq_0 T_3$$

・結合性

$$T_1 \leq_0 T_2 \Rightarrow T_1 \parallel T_3 \leq_0 T_2 \parallel T_3$$

識別不可能性の表現

- 計算量的なImplementation Relation : $T_1 \leq_{neg,pt} T_2$
2つの task-PIOA T_1, T_2 が多項式時間内で区別できない。

定義 どのような多項式時間 Env と ρ_1 に対しても
多項式時間 ρ_2 が存在し,

$$\left| P_{accept}(T_1 \parallel Env, \rho_1) - P_{accept}(T_2 \parallel Env, \rho_2) \right| \leq negl.$$

を満たす。

同様に推移性, 結合性を持つ。

安全性証明の目標

$$\underline{RS \leq_{neg,pt} IS \text{ を示すこと}}$$

- **RS** : *Real System* = 現実の証明対象プロトコル
 - 各プロトコル参加者
 - Adversary
 - Environment

- **IS** : *Ideal System* = 理想化した証明対象プロトコル
 - シミュレータ (プロトコル参加者の抽象化 + Adversary)
 - Environment (*RS*と同じ)
 - 理想機能

証明の流れ

□ はじめから $RS \leq_{neg,pt} IS$ の証明を行うことは難しい.

→ \leq の推移性を用い, 証明を分割.

分割の方法は以下の2種類.

□ 計算量的仮定を基にした分割

- 計算量的仮定を $\leq_{neg,pt}$ の式で定義しておく.

- 仮定の形式に合うように, RS と IS を変形する.

□ 中間となるシステム *Int* : *Intermediate System* を用いた分割

- RS , 計算量的仮定, IS の間を埋めるために用いる.

- *Int* の前後で, \leq_0 が成り立つよう構成する.

IS

\leq_0

$DH2$

$\leq_{neg,pt}$

$DH1$

\leq_0

Int

\leq_0

RS

Diffie-Hellmanの鍵交換プロトコル の解析

DDH仮定

計算量理論的定式化

$$\left| \Pr[A(g, g^a, g^b, g^{ab}) = 1] - \Pr[A(g, g^a, g^b, R) = 1] \right| \geq \text{non-negl.}$$

を満たす PPT アルゴリズム A は存在しない。

task-PIOA フレームワークで再定式化する。

$$SDDH \leq_{\text{neg,pt}} SDDHR$$

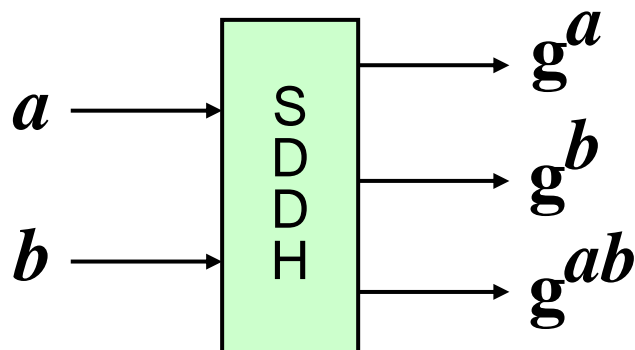
ただし,

$SDDH$: 「 (g^a, g^b, g^{ab}) を出力する task-PIOA」,

$SDDHR$: 「 (g^a, g^b, R) を出力する task-PIOA」.

SDDH と SDDHR

□ SDDH

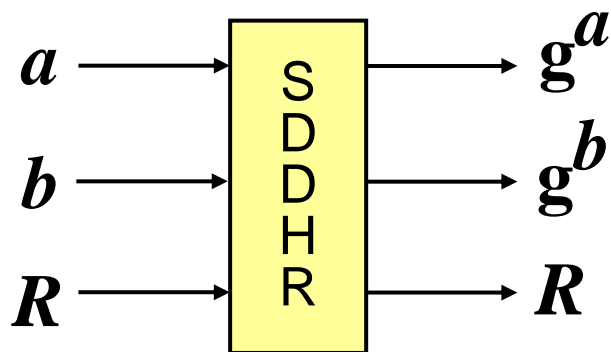


input : $\text{rand}(a)$, $\text{rand}(b)$

output : $\text{out}(A)$, $A = g^a$
 $\text{out}(B)$, $B = g^b$
 $\text{out}(C)$, $C = g^{ab}$

internal : fix-Aval , fix-Bval , fix-Cval

□ SDDHR



input : $\text{rand}(a)$, $\text{rand}(b)$, $\text{rand}(R)$

output : $\text{out}(A)$, $A = g^a$
 $\text{out}(B)$, $B = g^b$
 $\text{out}(C)$, $C = R$

internal : fix-Aval , fix-Bval

DDH仮定の等価性

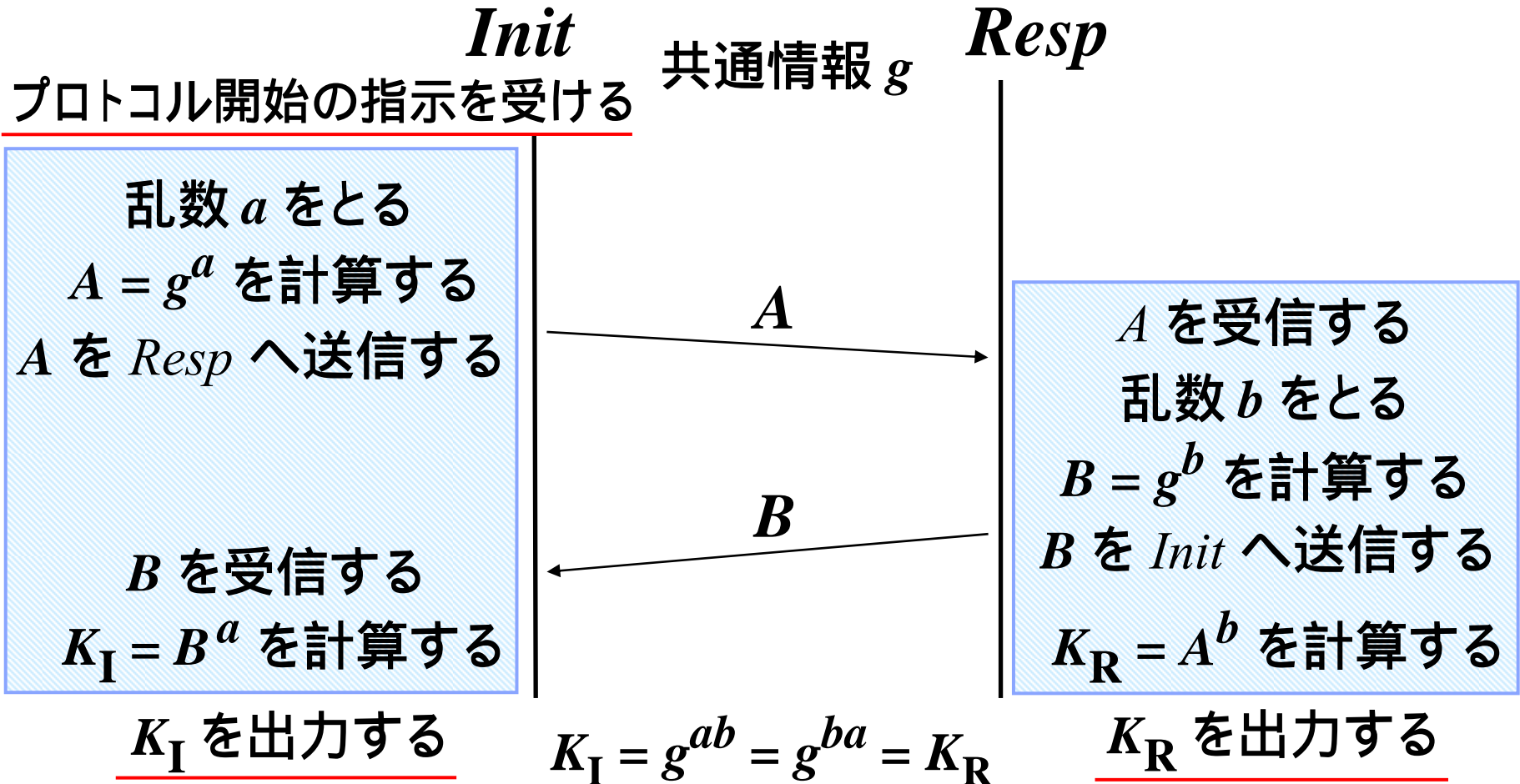
定理

DDH仮定が成り立つことと,

$SDDH \leq_{neg,pt} SDDHR$ が成り立つことは等価である.

Diffie-Hellman の鍵交換プロトコル

- Initiator *Init* と Responder *Resp* は以下の手順で鍵を共有する.



Init の action 一覧 (Code)

- **in(m)** プロトコル開始の指示

Effect :

If $received =$ then $received := \top$

- **rand(a)_{Init}** 乱数 a をとる

Effect :

If $aval =$ then $aval := a$

- **fix-Aval** A を計算

Precondition :

$aval$, $Aval =$

Effect :

$Aval := g^{aval}$

- **send(1, A)** A を送信

Precondition :

$A = Aval$, $received$

Effect :

none

- **receive(2, B)** B を受信

Effect :

If $Bval$ then $Bval := B$

- **fix-Kval_{Init}** K_I を計算

Precondition :

$aval$, $Bval$, $Kval_{Init} =$

Effect :

$Kval_{Init} := Bval^{aval}$

- **out(K)_{Init}** K_I を出力

Precondition :

$K = Kval_{Init}$

Effect :

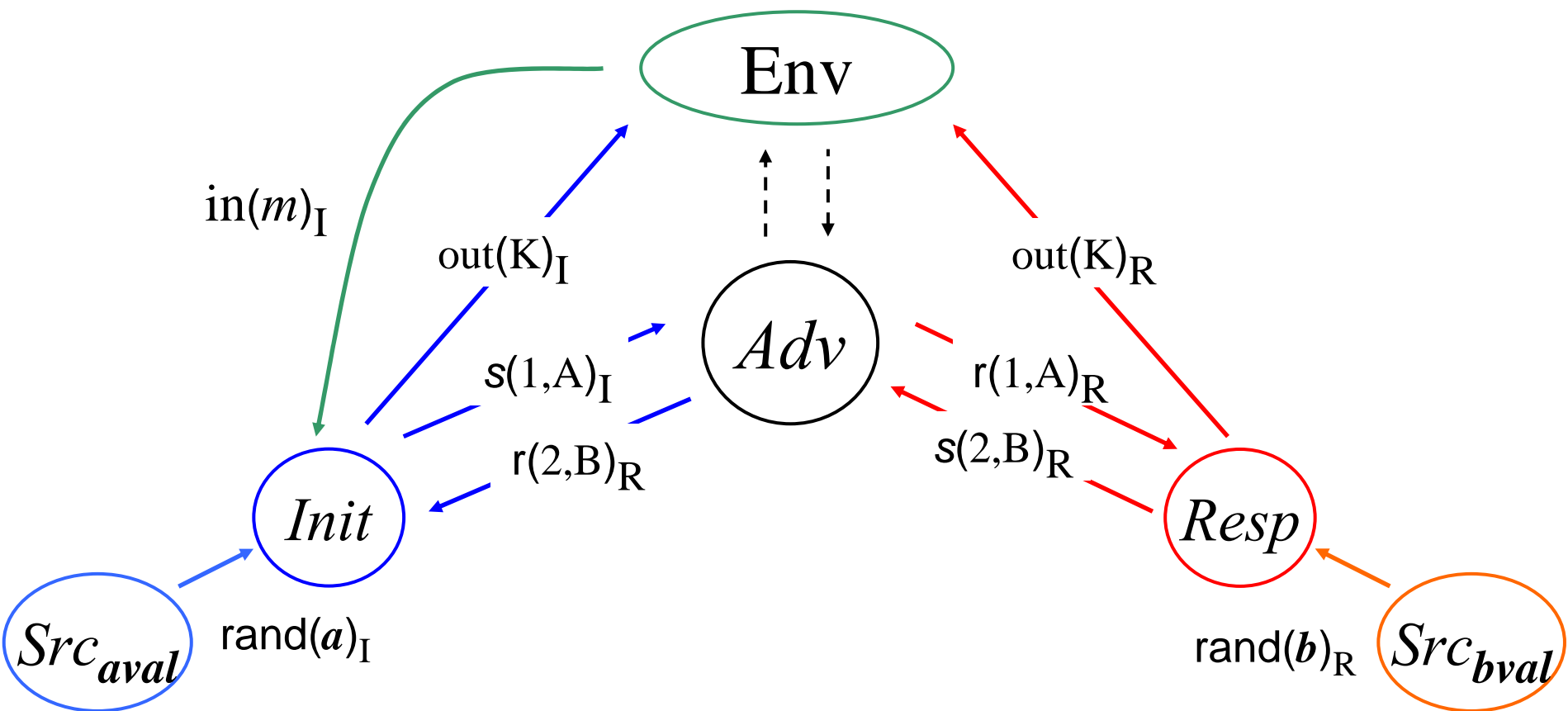
none

RS の構成

- RS は, 以下のように task-PIOA の結合で表される.

$$RS = Init \parallel Resp \parallel Adv \parallel Env \parallel Src_{aval} \parallel Src_{bval}$$

(Src は, 乱数を選ぶ task を持つオートマトン.)



IS を構成するために

□ 必要なものは次の3つ

- 理想機能
- シミュレータ *Sim*
- *Env* (*RS* と同じ)

□ 理想機能とは, プロトコルが提供する機能を理想化したもの.

□ シミュレータは, *IR* *Init* + *Resp* と *Adv* (*RS* と同じ)からなる.

- 理想機能からの入力を用いて, 処理を行う点が異なる.



鍵交換の理想機能

- 汎用結合可能性 (Universal Composability) における理想機能 (functionality) を参考にして構成することが可能。

鍵交換の理想機能を表す task-PIOA *Func_t*

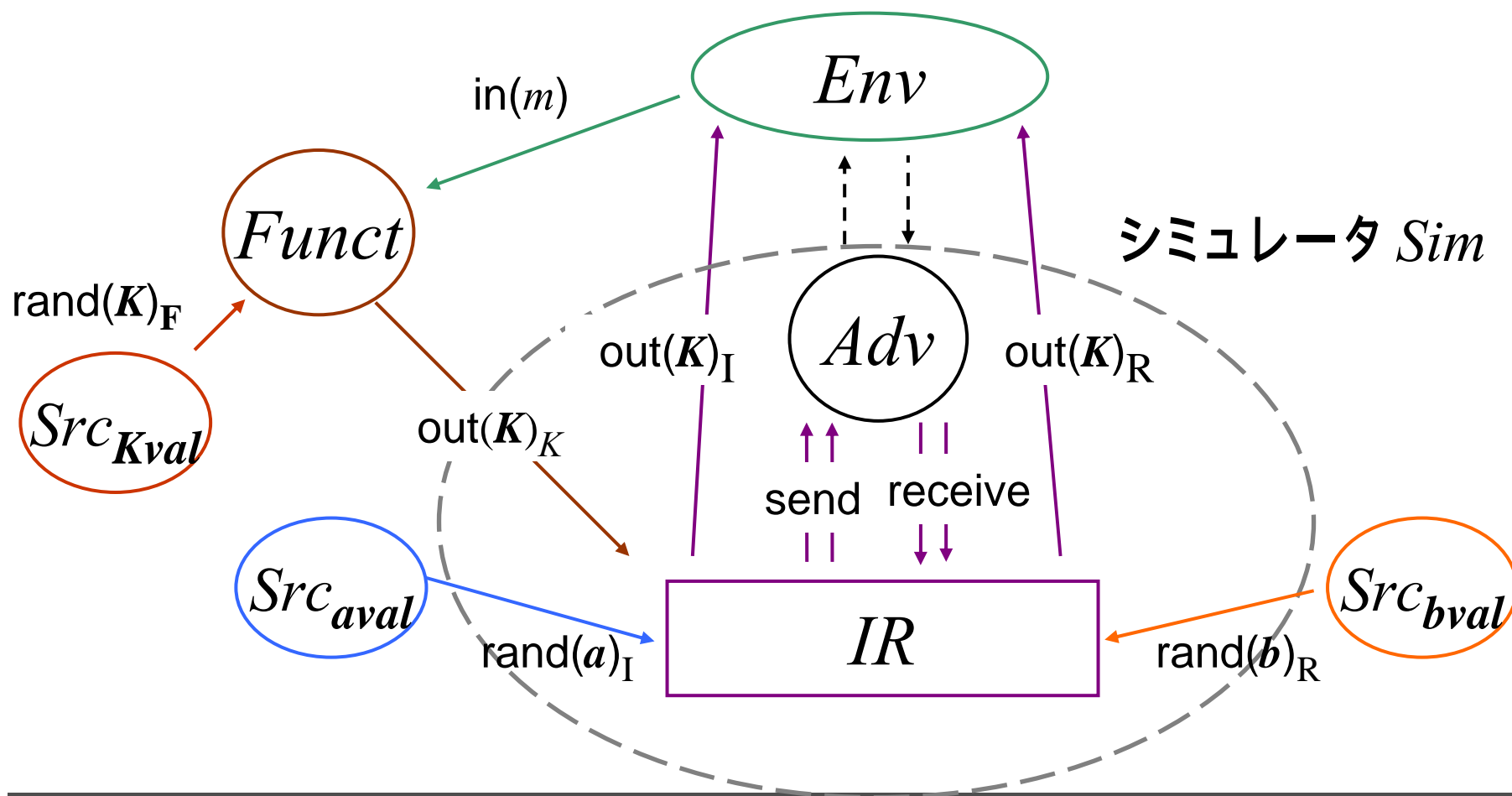
- i. 環境から指示を受け取る . $\text{in}(m)$
- ii. 鍵空間からランダムに鍵をとる . $\text{rand}(K)_{\text{Func_{t}}}$
- iii. とった値を出力する . $\text{out}(K)_{\text{Func_{t}}}$

注) 今回は passive&static Adversary を考えているため ,
便宜的に必要なインターフェイスだけを簡略化して記述した .

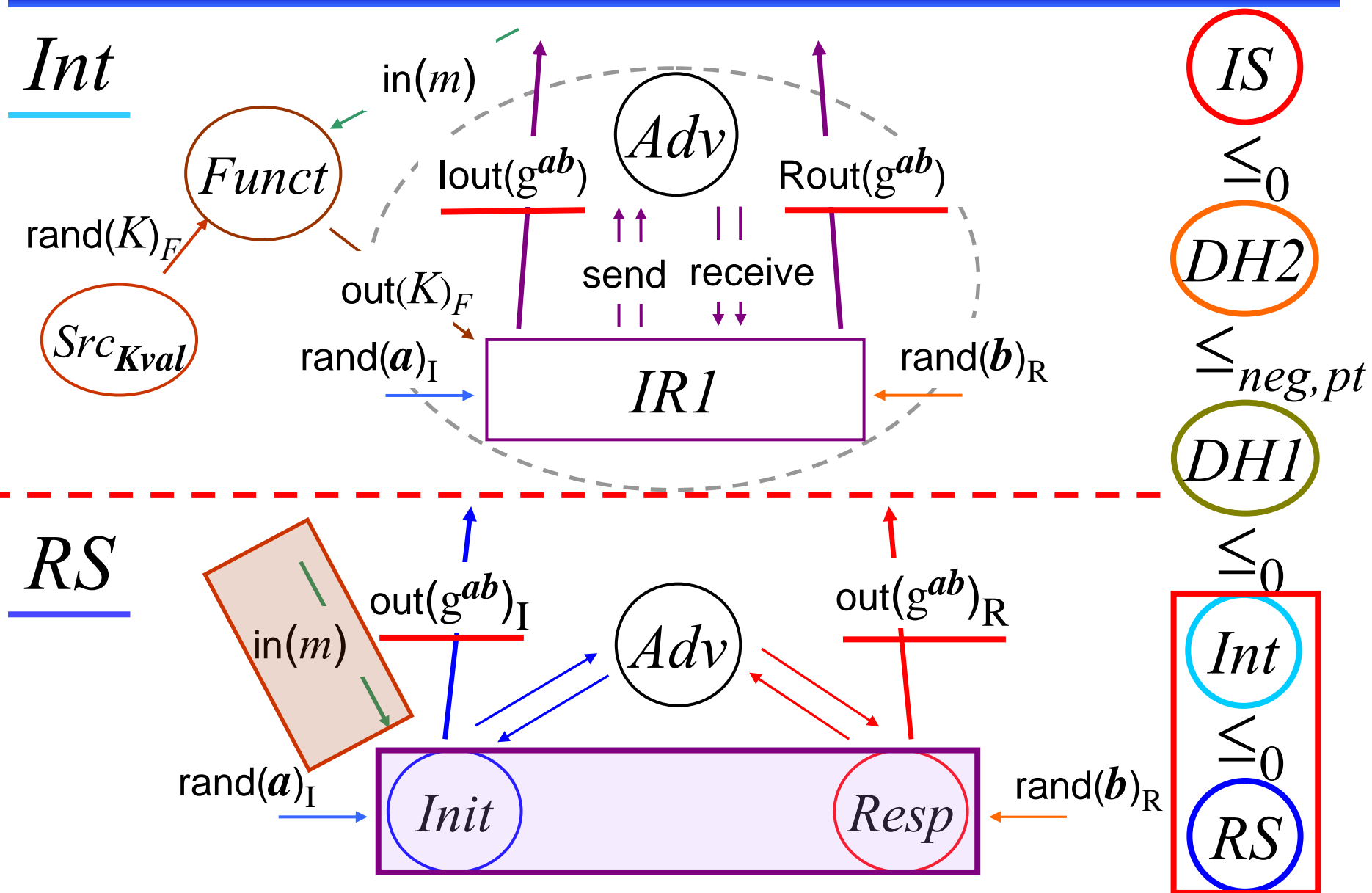
IS の構成

- IS は以下の task-PIOA の結合で表される。

$$IS = \text{Funct} \parallel \text{Sim} \parallel \text{Env} \parallel \text{Src}_{\text{aval}} \parallel \text{Src}_{\text{bval}} \parallel \text{Src}_{\text{Kval}}$$

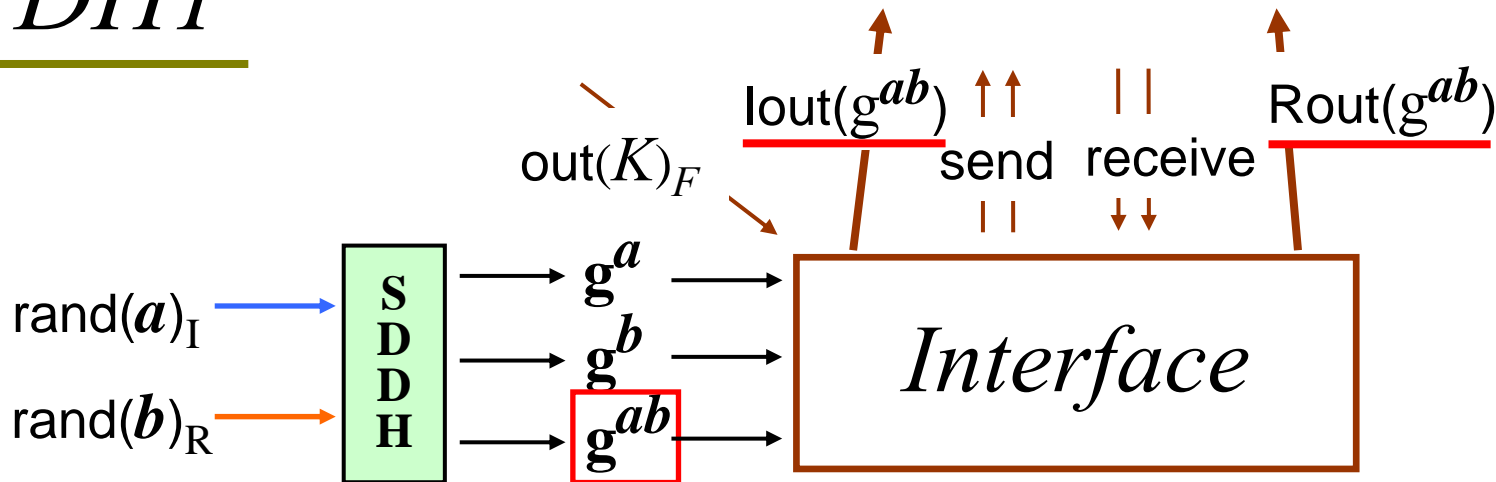


第1ステップ $RS \leq_0 Int$



第2ステップ $SubInt \leq_0 DH1$

DH1



IS

\leq_0

$DH2$

$\leq_{neg,pt}$

$DH1$

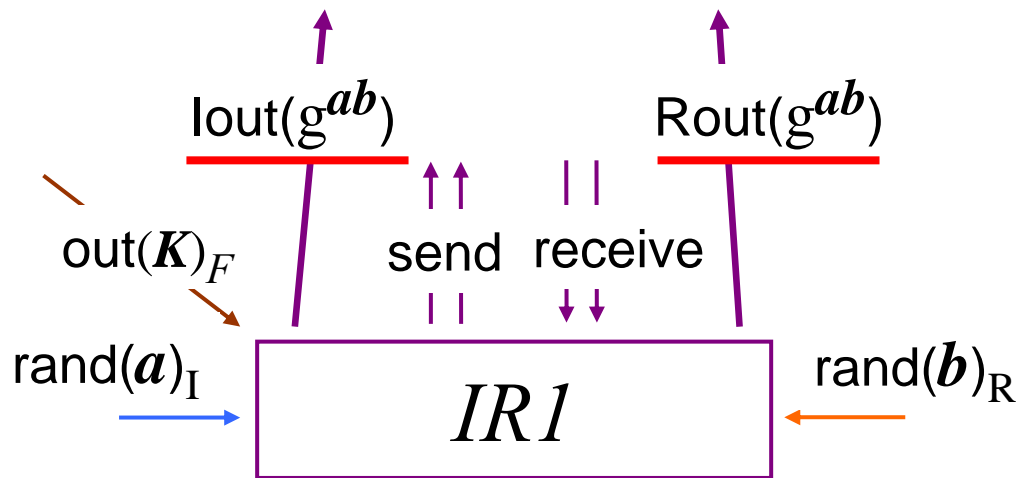
\leq_0

Int

\leq_0

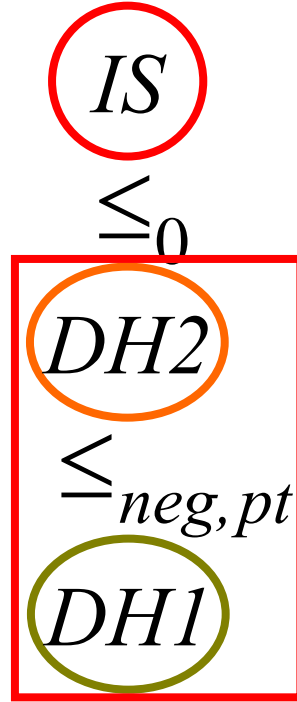
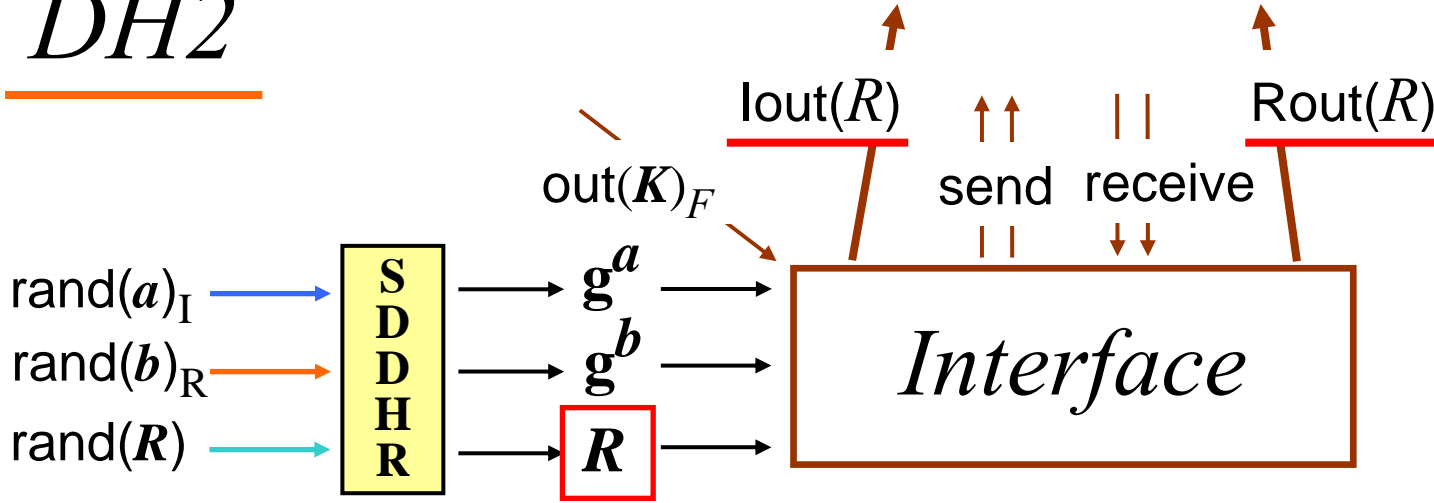
RS

SubInt

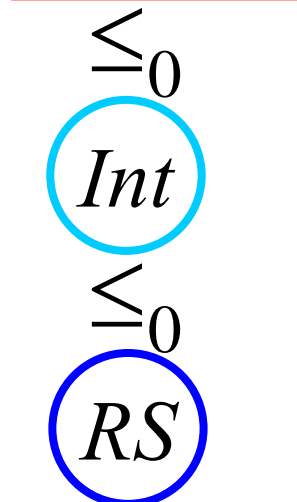
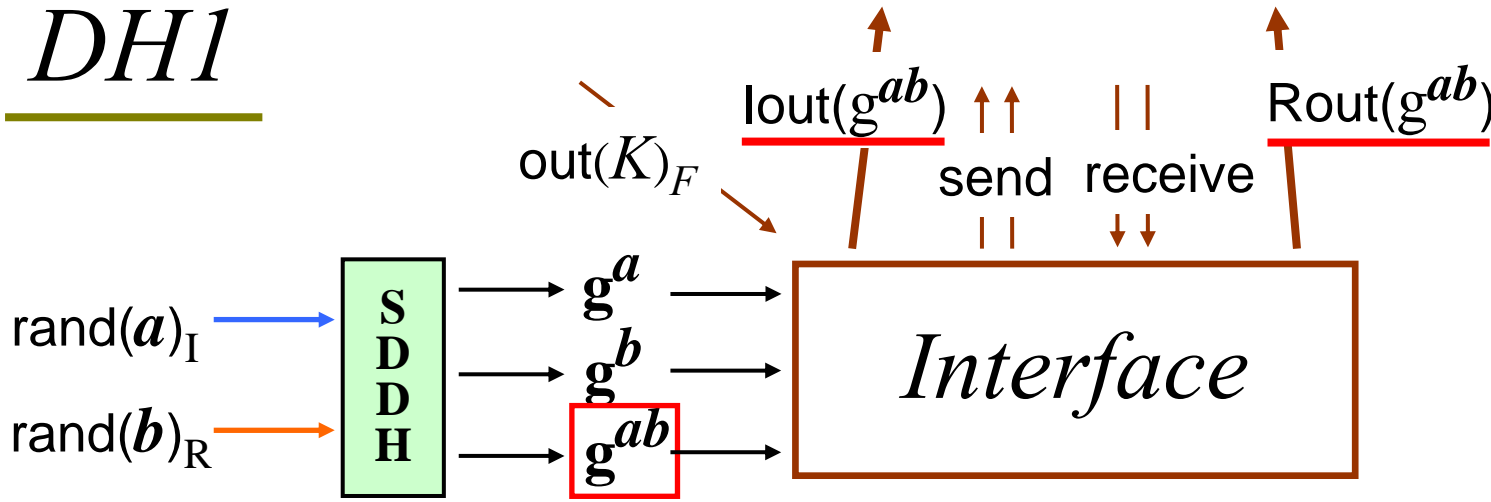


第3ステップ $DH1 \leq_{neg,pt} DH2$

DH2

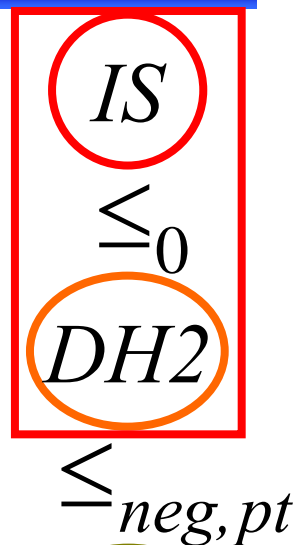
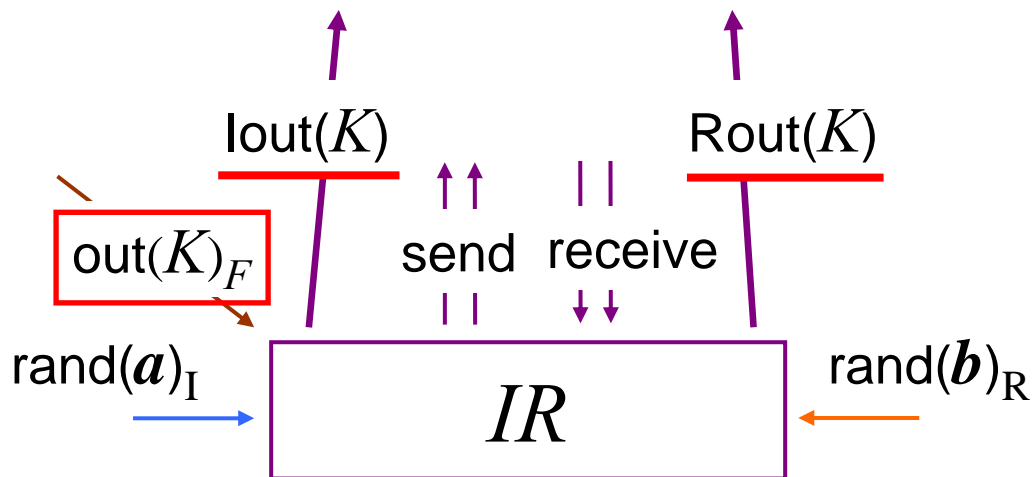


DH1

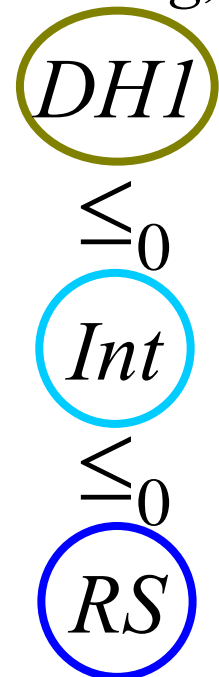
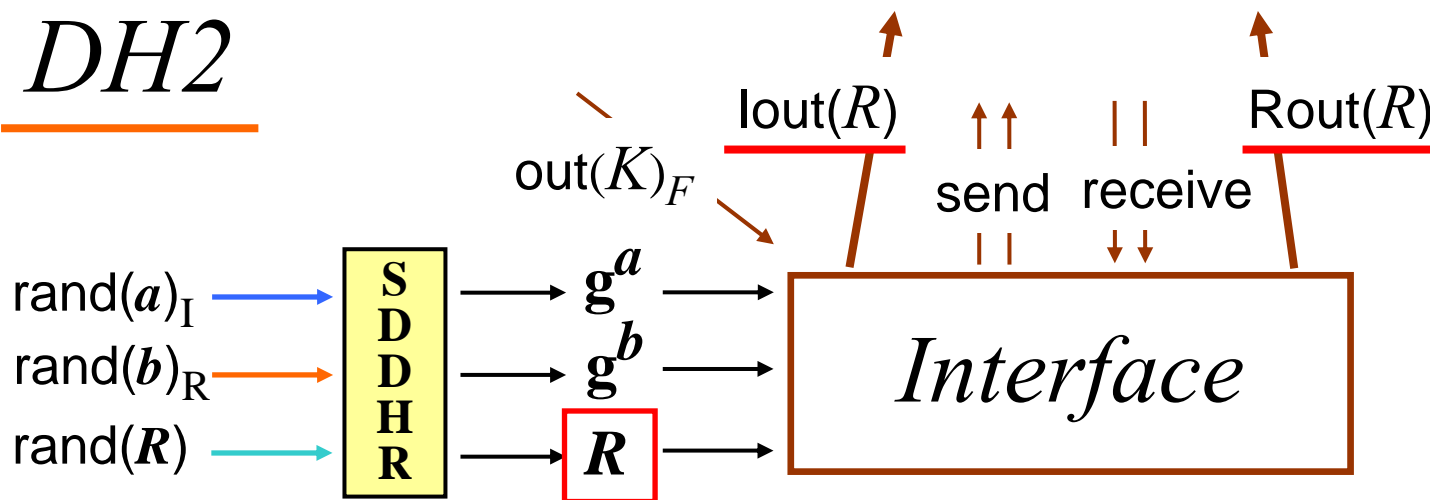


第4ステップ $DH2 \leq_0 SubIS$

SubIS



DH2



まとめ

- task-PIOA フレームワークの記述能力の確認として、Diffie-Hellman の鍵交換プロトコルの安全性証明を行った。
- task-PIOA フレームワークにおけるDDH仮定の再定式化を行い、それが従来のDDH仮定と等価であることを証明した。
- 鍵交換の理想機能を、task-PIOA フレームワークの形式に変換した。